

# 平成 30 年度制定 柔道整復師学校養成施設指定規則 における臨床実習教育が学生に与える効果について ——2018 年度入学生を対象としたアンケート調査報告——

織田 俊郎・清水 匠太・石川 貴之

帝京短期大学 ライフケア学科

## 【抄録】

**【問題・目的】**平成 30 年度より、柔道整復師学校養成施設指定規則が改訂され、臨床実習においては 45 時間 1 単位より、新規に 180 時間 4 単位へと変更された。新カリキュラム下での長期間における臨床実習の経験や学習は、学生の意欲（学習、就業などの将来像）にどのような影響を与えたか。また臨床実習をより意義あるものにするためにどのような努力が求められるか、アンケート調査をもとに検討する。

**【方法】**本学における臨床実習は卒業までの 3 学年において、臨床実習 I～IV の 4 期に分割して実施される。

各実習の前後にアンケートを配布し、a. 個人識別の記号 b. 学習や就業への意欲について c. 実習への意見や感想の 3 項目を記入させた。項目 b については①柔道整復師の資格取得への意志②勉強への取り組みの意欲③本学を卒業後、柔道整復師として働く気持ちの 3 点について、「全くない」の 0 点から「非常にある」の 10 点までの 11 段階で、実習の前後で自己評定を求め、数値を集計した。

**【結果】**設問①「柔道整復師の資格取得への意志」のみ、最終学年で実施する臨床実習 IV において、4 期の中で最も高い数値となったが、設問②「勉強への取り組みの意欲」設問③「本学を卒業後、柔道整復師として働く気持ち」についてはいずれも最終学年において数値の上昇を示したものの、初回の臨床実習 I の数値を上回る結果とはならなかった。また、臨床実習 I で示した各項目における数値が臨床実習 II および III で落ち込み、IV にて再び上昇した。

**【考察】**臨床実習を通じて職業的アイデンティティへの影響を受けた学生のうち、学科選択に対する意思決定、将来の職業像の確立を回避する傾向のある学生は、1 年生や 2 年生前期など、学生生活の早い段階で転籍や退学などの進路変更を選択していると思われる。学生が資格取得、柔道整復師としての就業に積極的意識を持てるよう、より多くの臨床体験、指導者と接する機会の幅を増やすことが課題の一つであると考えられる。

**【キーワード】**柔道整復、臨床実習、アンケート

## I. 問題・目的

臨床実習は教室における座学や実技の授業と異なり、医療現場という空間、また患者という他者の存在を介して学生が自らの職業的適正や求められる知識、能力について気づきを得られる機会であると考えられ、医療従事者を志望する学生には不可欠な要素であると思われる。同時に、他者の心身の健康に関わることから高い専門性や求められる責任が大きい医療業界にお

いて、将来像を目の当たりにした学生がエリクソンの提唱するところの職業的アイデンティティ、すなわち職業に関する自分らしさの意識に揺らぎを覚え、教職員の期待するものとは異なる反応を示す事や進路を選択することもまた考えられる<sup>1) 2)</sup>。学生を医療人として送り出し、社会に貢献する事を目的とする医療系資格校において、より良い臨床実習を通じて学生に積極的な行動、思考を喚起させ、質の高い医療人を目指すよう促すことは検討すべき課題であると

言える。

柔道整復師養成校における臨床実習においても、その目的は「実際の現場での学びを通し、養成施設での学習のみでは修得し得ない医療者としての態度を修得し、患者などの利用者を正しく理解して、柔道整復術に対するニーズを把握すると共に、柔道整復師がどうあるべきかを考察することを目的とする」とされている<sup>3)</sup>。柔道整復師学校養成施設指定規則は平成30年度より改訂され、臨床実習は45時間1単位より、新規に180時間4単位へと変更されている。このことは、学生が臨床実習を通じて受ける影響、体験やそれを基に自身の職業的アイデンティティについても考える機会が増大すると考えられる。

臨床実習を通じて学生が受ける影響については、平成30年度の規則改訂以前より研究がなされており、臨床実習の学生に与える効果として医療機器の取り扱いや患者接遇への理解度の高まり<sup>4)</sup>、スタッフとの良好な関係の構築が実習の充実度への影響する可能性<sup>5)</sup>、職業的モデルとの出会いによる職業的アイデンティティ形成への影響<sup>6)</sup>等の報告がある。今回の研究対象となった改訂後の臨床実習については、実習後にコミュニケーションに対する苦手意識と社交不安傾向が低下したとの報告がある<sup>7)</sup>。

本学における臨床実習では、旧カリキュラム下では学内の臨床実習施設にて2年生次の一定期間を臨床実習期間とし、1班あたり3～4名の学生が1日約5時間の実習を9日前後で行い、順次交代して完了させる形式を取っていた。今回の研究対象となる新カリキュラム下での臨床実習については、1年生後期から3年生前期までと複数学年にわたり、臨床実習ⅠからⅣまでの4期に分割、実施される。1班6名前後の学生が週に1回、1日4時間前後の実習を授業期間中の12回にて1期を完了する構成となり、臨床現場にて得られる学び、そして自らの柔道整復師としての将来像について考える機会をより多く提供していると考えられる。一方で、知識や技術に乏しく、大学生活にもようやく順応し始めた初年度より、卒業や国家試験を半年後に控えた最終学年までの長期間にわたる実習は学生の精神的、肉体的負担として学習や就業意欲へ影響を与えている可能性も考えられる。そこで、新カリキュラム下での長期間における臨床実習で

の経験や学習は、学生の意欲（学習、就業などの将来像）にどのような影響を与えたか、また臨床実習をより意義あるものにするためにどのような努力が求められるか、アンケート調査をもとに検討する。

## Ⅱ. 方法

### 1. 調査対象者

調査対象者は指定規則改正後の初年度にあたる2018年度に柔道整復専攻昼間部に入学者とした。臨床実習の前後に1枚ずつ配布し、同一の人物が実習の前後で記入したと判別できるアンケート2枚を1セットで有効票とし、集計に用いた。アンケートを配布した人数はそれぞれ臨床実習Ⅰ：44名（有効票36回収率81%）、臨床実習Ⅱ：35名（有効票29回収率82%）、臨床実習Ⅲ：30名（有効票26回収率86%）、臨床実習Ⅳ：27名（有効票27回収率100%）であった。

### 2. 調査時期

調査時期はそれぞれ臨床実習Ⅰ：2018年9月から12月（1年生後期）、臨床実習Ⅱ：2019年4月から7月、臨床実習Ⅲ：2019年9月から12月、臨床実習Ⅳ：2020年4月から7月である。Ⅰ期ごとに臨床実習前と臨床実習終了後に学生に対し調査を行った。

なお、臨床実習Ⅳについてはその開始時期が新型コロナウイルス感染症拡大に伴うロックダウンや対面授業の制限により、実習前アンケートを取ることが困難な状況にあった。そのため、実習後アンケートのみを集計している。

### 3. 調査内容

(1) アンケートの記入項目は a. 同一人物における実習前後のアンケートを識別する記号、b. 学習や就業への意欲について、c. 実習への意見や感想の自由記述の3点である。項目 a には匿名性を保持するために①自分の誕生日の星座の頭文字、②電話番号の下4桁、③誕生日の日付の3項目を並べて記入させた。項目 b については①柔道整復師の資格取得への意志、②勉強への取り組みの意欲、③本学を卒業後、柔道整復師として働く気持ちの3点について、「全くない」の0点から「非常にある」の10点までの11段階

で、実習の前後で自己評定を求めた。  
 (2) 臨床実習 I～IVについて、実習後アンケートより平均値および標準偏差を集計した。

#### 4. 倫理的配慮

実習前ガイダンス時に研究同意書を配布、記述したくない場合や記述すべき内容がない場合は未記入でよい事、統計処理後のアンケートは適切な方法で廃棄すること、個人の回答が外部

に知られることはなく、結果は学術的な目的以外には使用しないことを口頭と書面にて説明。同意書に記名した学生に対してのみ、アンケートを配布した。

### Ⅲ. 結果

アンケート調査の結果、以下の通りとなった。臨床実習IVについては、前述の通り実習前アン

Table 1. 臨床実習アンケート集計結果

		臨床実習 I (n=36)		臨床実習 II (n=29)		臨床実習 III (n=26)		臨床実習 IV (n=27)	
		実施人数	44	35	30	27			
		mean	sd	mean	sd	mean	sd	mean	sd
資格取得への意志	前	8.55	1.48	8.24	1.37	7.76	2.45	-	-
	後	7.86	1.88	7.48	2.04	7.53	2.96	8.33	2.55
勉強への取り組み 意欲	前	7.61	1.82	6.68	1.56	6.8	1.71	-	-
	後	7.69	1.83	6.55	1.91	6.92	2.2	7.22	1.91
柔道整復師として 働く気持ち	前	8.25	1.94	7.38	2.72	6.15	3.13	-	-
	後	7.61	2.26	6.34	3.33	6.19	3.54	6.37	3.79

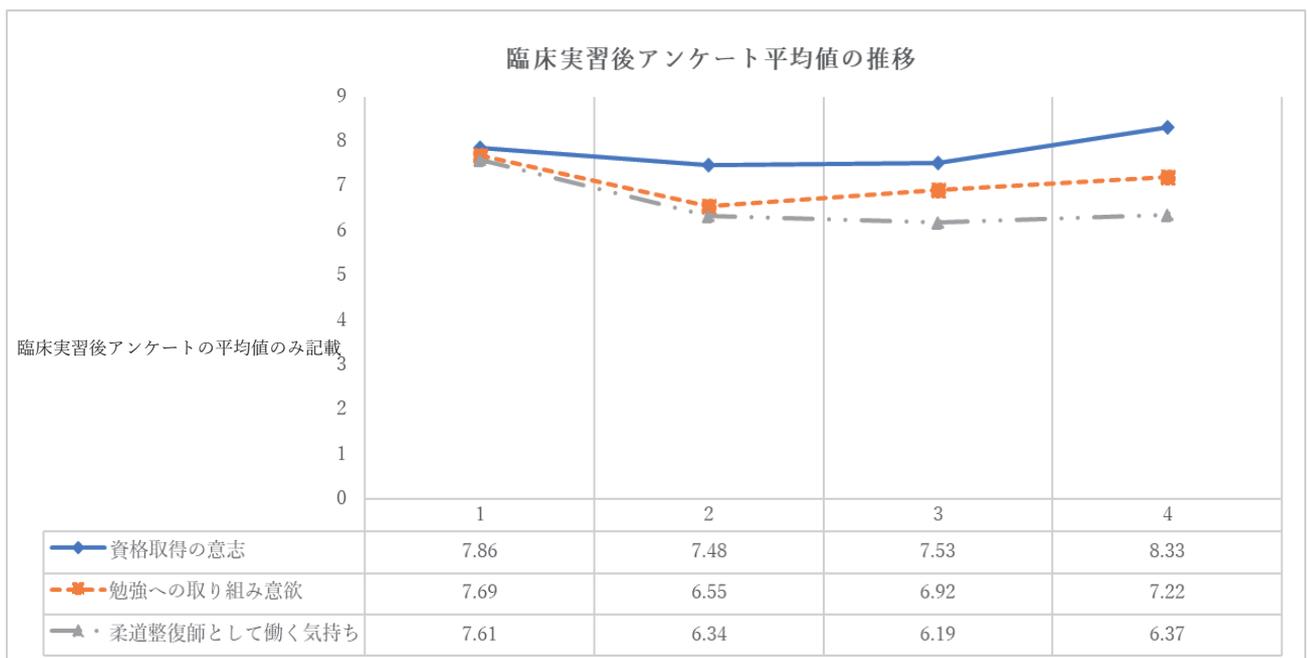


Figure 1. 臨床実習後アンケート集計結果

ケートを回収することができなかつた。そのため今回はⅠ～Ⅳ全ての臨床実習で回収する事ができた実習後アンケートについてのみ集計した。

### 1. 臨床実習Ⅰ

①柔道整復師の資格取得への意志、②勉強への取り組みの意欲、③本学を卒業後、柔道整復師として働く気持ち（以下、設問①、設問②、設問③とする）はそれぞれ設問①：平均 7.86 標準偏差 1.88、設問②：平均 7.69、標準偏差 1.83、設問③：平均 7.61、標準偏差 2.26 であった。実施人数 44 に対し、実習の前後で同一人物が記入したと判明できるアンケート回答を得られた人数（以下、有効票とする）は 36 であった。

### 2. 臨床実習Ⅱ

設問①：平均 7.48、標準偏差 2.04、設問②：平均 6.55、標準偏差 1.91、設問③：平均 6.34、標準偏差 3.33 であった。実施人数 35 名に対し、有効票は 29 であった。

### 3. 臨床実習Ⅲ

設問①：平均 7.53、標準偏差 2.96、設問②：平均 6.92、標準偏差 2.2、設問③：平均 6.19、標準偏差 3.54、であった。実施人数 30 名に対し、有効票は 26 であった。

### 4. 臨床実習Ⅳ

設問①：平均 8.33、標準偏差 2.55、設問②：平均 7.22、標準偏差 1.91、設問③：平均 6.37、標準偏差 3.79 であった。実施人数 27 名に対し、有効票は 27 であった。

## Ⅳ. 考察

各項目より、設問①「柔道整復師の資格取得への意志」のみ、最終学年で実施する臨床実習

Ⅳにおいて、4 期の中で最も高い数値となったが、設問②「勉強への取り組みの意欲」設問③「本学を卒業後、柔道整復師として働く気持ち」についてはいずれも最終学年において数値の上昇を示したものの、初回の臨床実習Ⅰの数値を上回る結果とはならなかつた。

このことについては、学生が進級と共に知識や経験を重ね、同時に部分的とはいえ自らの将来像（勤務形態や必要とされる能力など）を想像し、現在の自分との対比における不安感や職業的アイデンティティが揺らいだことが反映されたと考えられる<sup>2)</sup>。

最終学年となる臨床実習Ⅳにおいては全ての設問における数値が臨床実習Ⅲを上回る結果となった。臨床実習Ⅰ～Ⅳの数値を辿ると、臨床実習Ⅰで示した各項目における数値が臨床実習ⅡおよびⅢで落ち込み、Ⅳにて再び上昇している。臨床実習を通じて初期の頃の意欲が中期に落ち込み、後期あるいは卒業学年にて再度上昇する傾向は他の医療系資格校にも見られ、同様に卒業を前に自らの職業イメージを持ち、進路の決定を受け入れるようになってきたことが一因と考えられる<sup>8)</sup>。

また、4 期の実習にわたり回数を重ねる毎に実施人数が減少し続けている。特に臨床実習Ⅰ～Ⅱにかけて著明であり、学生は自らの選択として資格取得や柔道整復師としての就労をしないという判断から、退学や転籍という進路決定を早期に行っていることになる。これには本学の制度として学業不振や志向の変化から退学や留年の他に、他学科への転籍が可能であり、当初の卒業予定年数である 3 年以内で転籍し卒業するという過程を実行するには、2 年生前期修了まで判断する必要がある、ということも影響していると考えられる。学籍変更者の数と臨床実習 1 期ごとの遅刻率、欠席率との関係においても同様の事が読み取れる。

Table 2. 学籍変更者数と臨床実習 1 期ごとにおける遅刻率、欠席率との関係

	参加人数	学籍変更人数	遅刻率	欠席率
臨床実習Ⅰ	44	9	27%	18%
臨床実習Ⅱ	35	5	5%	11%
臨床実習Ⅲ	30	3	3%	3%
臨床実習Ⅳ	27	0	0%	0%

加えて、同じ資格の取得を目標とするにおいても大学と専門学校では生徒に柔道整復師の資格を取得する事への熱意や、その後の進路意識について、専門学校の学生の方がより資格取得、接骨院開業の意志が強いと指摘する報告もある<sup>9) 10)</sup>。

このように、医療系専門職を志望したに関わらず、早期から進路を変更する事、将来に向けての意志決定を明確にできない学生がいる事については、落合ら(2006)<sup>8)</sup>は医療系大学への進路決定プロセスと入学後の職業的アイデンティティの関連について、大学進学時の進路決定プロセスを「早期決定型」「途中変更型」「直前決定型」「回避型」「出会い型」の5つに分類し調査を行っている。その中でも「回避型」の学生は職業イメージが拡散しており、現在の学科への進路決定を自分の決定として引き受けてない、他者から言われたから選んだ、として決定を回避する形を取るとしている。そして自己の医療職観も持てず、職業的アイデンティティを測る得点は他の形の学生よりも低く、その差は大学4年間のどの学年でも同じであったと指摘している。臨床実習は普段の授業以外の時間に医療現場にいる事を求められ、専門知識や技術の他にも体調や時間の管理、適切な振る舞いを求められる側面がある。柔道整復師の資格を取り、就業するという意思や将来像が希薄な学生にとっては職業的アイデンティティを確立する前に精神的、肉体的な負荷によって不安や否定的な印象の方が強くなり、結果として本学においてもこの「回避型」に近い形で進路選択をした学生が一定数おり、2年生前期までの実習参加者減少に影響したと推察される。

学生が資格取得、柔道整復師としての就業をしないという判断を下すことについて、柔道整復師を養成する学校としては、学科選択の満足度や、学習モチベーションの向上に努める必要があると考える。大橋ら<sup>2)</sup>によれば、職業的モデルの有無が職業的アイデンティティの維持に影響を与えていること、加えて早期からの臨床体験を通して低学年次から臨床実習へ参加させることは、職業的モデルとの出会いの機会を増やし、職業的アイデンティティを高める事に繋がること示唆されている。また、柔道整復師養成校において、トレーナー活動など学外の臨床現場へ学生を帯同させることが学習モチベ

ションの向上につながったとの報告がある<sup>6) 11)</sup>。

本学においては3年間、4期の臨床実習を全て学内施設にて行っている。先行研究が示すように、1～2年生までの期間により多くの臨床体験、指導者と接する機会を増やし、一部を学外の臨床現場と提携するなど、学生が資格取得、柔道整復師としての就業により積極的意識を持てるよう、機会の幅を増やすことが課題の一つであると考えられる。

## V. 今後の課題

本研究の限界として、11段階での評価を学生アンケートに記入させる手法を取ったが、数値がいくつ上昇すれば実質的な上昇とみなすか、具体的な基準が設定されておらず、検定も行っていないため、あくまで実習後の数値について1期ごとの差異のみを扱い、考察を行っていることである。また、その数値が実際に学生の行動の変化として現れなければ実習の効果として影響があったとは言い難い点が挙げられる。学生の行動変化やモチベーションの推移については、臨床実習期間だけでなく、各学期の前後でのアンケート調査や、授業態度、試験成績等の変化からも調査することでより詳らかになると考えられた。

### 【文献】

- 1) 金子千香・平林茂・菅沼一男・眞保実(2018) 理学療法学科学生の長期臨床実習による大学生活不安変化について 帝京科学大学紀要 14, 313-317
- 2) 大橋ゆかり・吉野貴子・本多陽子・落合幸子(2006) 臨床実習教育が学生の職業的アイデンティティ形成に及ぼす効果 理学療法学 33 (6) 311-317
- 3) 公益社団法人全国柔道整復学校協会(2018) 臨床(地)実習ガイドライン
- 4) 大野均・甲斐範光・郡佳子・畑山元政・橋本泰央・上村知弘・石川貴之・土井誠・川崎一郎(2014) 本学の柔道整復教育における臨床実習が学生に与える効果の検討 - 臨床実習後アンケート調査報告 - 帝京短期大学教育研究報告集 4, 49-54
- 5) 田辺達磨・田村哲也・大澤裕行・松本揚(2015) 臨床実習のアンケート調査の結果報

告 了徳寺大学研究紀要 2016 (10), 61-70

- 6) 杉本恵理 (2015) 柔道整復師専門学校生の職業アイデンティティ形成に現場実習が及ぼす影響: - 本校学生への実習後アンケート結果から - 柔道整復接骨医学第 28 巻 1 号, 10-16
- 7) 小黒正幸・原朋弘・中野恵介・行田直人 (2020) 臨床実習教育がコミュニケーション意識と社交不安に及ぼす影響 - 柔道整復師臨床実習施設における実習の効用 - 帝京科学大学紀要 16 15-23
- 8) 落合幸子・本多陽子・落合良行・藤井恭子・塚本信宏・大橋ゆかり・野々村典子・黒木淳子 (2006) 医療系大学への進路決定プロセスと入学後の職業的アイデンティティとの関連 医学教育 37 (3), 141-149
- 9) 廣瀬文彦 (2009) 大学柔道整復学科新入生の意識調査 - 2008 年度入学 - 帝京大学スポーツ医療研究 33 - 38
- 10) 服部辰広・久保山和彦・猪越孝治・樋口毅史・松田康宏・伊藤譲 (2018) 柔道整復師養成課程に所属する大学生と専門学校生の柔道整復師に対する意識の相違について (第 2 報) - 2014 から 2017 年度入学生に対するアンケート調査より - 日本体育大学紀要 47 (2), 191-199,
- 11) 西村優一・大隅祐輝・渡邊靖弘 (2018) スポーツトレーナーによる実践的現場教育におけるその効果について - NITT 学生部の挑戦 - 敬心・研究プロジェクト成果報告 敬心・研究ジャーナル 95-98

# Effects of clinical practice on students From rules for designating training facilities enactment in 2018

—Questionnaire report for new students in 2018—

Toshiro ODA • Shota SHIMIZU • Takayuki ISHIKAWA

Department of Life Care, Teikyo Junior college

---

## **【abstract】**

**【Purpose】** From 2018, the rules for designating judo therapist school training facilities were revised, and clinical practice was changed from 1 credit for 45 hours to 4 credits for 180 hours. The long-term clinical training experience has it made a motivation to students?

**【Methods】** A questionnaire was distributed before and after each practical training, and the participants were asked to fill in three items: a. personal identification symbol, b. willingness to learn and work, and c. opinions and impressions of the practical training. Regarding item b, 1) Willingness to acquire certification as a Judo therapist, 2) Willingness to study, and 3) Willingness to work as a Judo therapist after graduating from the university, from 0 points of "not at all" to "very much" We asked for self-assessment before and after the practical training on an 11-point scale up to 10 points, and totaled the figures.

**【Results】** Only question 1 "Willing to acquire a Judo therapist qualification" was the highest value among the 4 periods in clinical training IV conducted in the final year, but question 2 "Motivation to study" Regarding question 3, "How do you feel about working as a judo therapist after graduating from this university?" In addition, the numerical values for each item shown in clinical training I dropped in clinical training II and III, and rose again in IV.

**【Discussion/Conclusion】** Among the students whose occupational identities have been affected through clinical training, those who tend to avoid making decisions about course selection and establishing future occupational images are It seems that they choose to change course such as transferring or dropping out at an early stage. One of the challenges is to increase the range of opportunities to have more clinical experience and contact with instructors so that students can have a positive awareness of obtaining qualifications and working as judo therapists.

**【Key words】** Judo therapy, Clinical practice, Questionnaire